

社会科の授業と教材

—長岡・有田論争—

Class and teaching material of social studies:
— Nagaoka and Arita Education Controversy —

大友 秀明*
Hideaki OTOMO

【キーワード】社会科 教材 授業 追究

はじめに

現代の我が国は教育改革の時代にある。近年、文部科学省の中央教育審議会から数多くの答申が出されている。また、文部科学省以外の省庁が教育に関する報告書・提言なども提出している。さらには、総理大臣直属の内閣府に教育改革を議論する機関が恒常的に設置され、そこから報告や提案が頻繁に出されるようになってきている。現代の教育政策動向を知るためには、文部科学省のホームページだけでなく、内閣府や財務省などの省庁のホームページへのアクセスが欠かせない。今日、学校教育は「改革」への要求に絶えずさらされている。

目下、文部科学省が次期学習指導要領の原案を中央教育審議会に提示し、その原案をもとに議論を深め、2016年度中に答申をまとめる予定になっている。

社会科、地理歴史科、公民科の教育改革に関しては、①学習内容、時間などの「量」より、学習の「質」の向上を重視していること、②「どのように学ぶか」という授業の方法の在り方、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の普及をめざしていること、③高校では、教科横断的な知識を活用できる新科目の設置と必修化を図ろうとしている点などが注目されている。

本稿では、現在の社会科をめぐる問題状況や教育改革の方向性を確認したうえで、社会科の授業や教材の在り方をめぐる長岡文雄氏と有田和正氏の教育論争を取り上げ、その意義を考察したい。

1. カリキュラム改革とアクティブ・ラーニング

2014年11月に、学校の教育内容などを定めている学習指導要領（幼稚園は教育要領）の改訂に向けて、文部科学大臣の諮問機関・中央教育審議会に諮問文が出された。今後は、審議会の答申を受けて、学習指導要領の改定、教科書の編集・検定を経て、東京オリンピック・パラリ

ンピックが開催される2020年から順次実施の予定である。諮問文の冒頭に、下記のようにある。

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は、厳しい挑戦の時代を迎えていると予想されます。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく変化し、子供たちが就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになるだろうと指摘されています。また、成熟社会を迎えた我が国が、個人や社会の豊かさを追求していくためには、一人一人の多様性を原動力とし、新たな価値を生み出していくことが必要になります。

このように今後の社会の特質を見据えたうえで、学習・指導については、「何を教えるか」だけでなく、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視し、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の教材、指導法、評価法について検討されることになっている。

文部科学省は平成24年8月28日に発表した『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』（中央教育審議会答申）において、学校教育への「アクティブ・ラーニング」の導入を明確に打ち出した。その定義は、以下の通りである。

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者が能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

* 埼玉大学教育学部社会講座

では、なぜアクティブ・ラーニングが必要なのか。それは、これからの社会に求められる人材が大きく変化しているからだといえる。諮問文の冒頭の記述のように、これからの時代には、様々な知識や情報を活用して、課題を他者と共に解決していくことのできる人材が求められている。

また、これからの社会で求められる資質・能力として、「何事にも主体的に取り組もうとする意欲」「多様性を尊重する態度」「他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク」「コミュニケーションの能力」「豊かな感性や優しさ、思いやりなどの豊かな人間性」などが挙げられている。

問題は、この求められる資質・能力をどのような方法・場面で育成できるのかということである。今後、「アクティブ・ラーニング」の具体的な在り方、特に、学習・指導方法と教育内容をどのように関連付けるかが重要になる。換言すれば、資質・能力ベースと内容ベースをどのように折り合いをつけながらカリキュラムを編成するかが問われている。

ただし、この「アクティブ・ラーニング」とは全く新しい教授・学習方法ではない。我が国の長年の「授業研究」では、「何のために、何を、どのように教えるか」という授業の基本的課題を問題にしてきたし、その研究成果の蓄積もある。何れは、戦後の「授業研究」の諸潮流を整理し、歴史的に検討することを通して、今日の課題に答えることが必要と考えるが、後日検討してみたい。

現在議論されている「アクティブ・ラーニング」は社会科の実践史の中では、「指導法・教材の工夫」に特化した点に特色がある。このような傾向は、過去においても存在する。1980～90年代の社会科の研究授業では、たとえば、「教育技術」「法則化」「ネタ教材」「ヒント教材」「モノ」「ディベート」「シミュレーション」「ロールプレーイング」等をキーワードにし、教材の「面白さ」や授業法の「楽しさ」「容易さ」を求める傾向があった。

このような動向に対して、当時から批判もあったが（教育実践研究会編『〈子ども不在〉の教育論批判』大和出版、1990年）、ここでは、社会科実践史に残る有田和正氏と長岡文雄氏の論争を取り上げ（谷川彰英『戦後社会科教育論争史に学ぶ』明治図書、1988年）、両氏の教材観の違いを明らかにすることによって、そこから、社会科の授業や教材の在り方について、考察したい。

2. 長岡・有田論争の経緯

本論争の直接の発端は、1982年「社会科の初志をつらぬく会」の全国集会において、有田和正氏（当時・筑波大附属小学校）が提案した「道の変化とくらしの変化」（第3学年）の実践記録の検討である。

有田提案のテーマは「問いかけの姿勢をどう育てるか」であり、その指導計画は次のとおりである。

第一次：創立記念日を契機にして、学校のできた頃の様子やその変化について調べる。

第二次：学校ができた頃（約百年前）の文京区の人々のくらしや町の広がりについて調べる。

第三次：東京の町の広がり方について調べる（実験授業で可能性をさぐる）。

第四次：変わってきた文京区の人々のくらしについて調べる。

第五次：これまでの学習を整理し、年表や紙芝居・パノラマ・地図などにまとめる。

提案は第三次のものである。この授業は、東京の町の広がりや、「墓地」が郊外へと移っていく様子から理解させていくものである。

全国集会に先立って、横浜の島本恭介氏は、有田実践について、次の4点の疑問を提示している（『考える子ども』144号、1982年）。

①子どもにとって本当に切実な問題なのか。

有田実践の「学校ができた頃、東京の町はどこからどこまでか」「このような地域に墓地が開かれたのはなぜか」「まちの広がりのもとになった鉄道はいつごろから、どのように広がっていったか」などの問題は興味のある問題ではあるが、子どもにとって切実な問題になりきれていないのではないかという疑問である。

②もっと問題をみいだす所に時間をかけるべきではないか。

東京の町の広がりやに目が向き、それを問題にするならば、一体何を調べればその広がりを見ることが出来るのかということ子どもに考えさせるべきではないかという疑問である。

③速効薬にとらわれすぎではないだろうか。

「墓地」は子どもの意表をつき、子どもの思考を揺さぶることができ、問いかけの姿勢をつくる速効薬といえるが、それは教師からの刺激であり、もろさを感じるという疑問である。

④問いかけの質は高まっているのだろうか。

各々の子どもによって違う問いかけの姿勢や質の高まりを問題にすべきではないかという疑問である。

島本氏の有田実践に対する疑問は、一つには、子どもの問題・関心と教材との接点にかかわる教材に関するものであり、もう一つは、子どもの問いかけの質にかかわる子どもの認識に関するものである。

全国集会では、島本氏の疑問を中心に活発な議論が展開されたようである。集会後の報告には「今までの初志の会の授業のスタイルとは違った提案授業（第9時）に対して、ある種のとまどいと多くの疑問が集中した」「島本氏の提案の最初にもあるように、本当に切実な問題であったのだろうかという考えが、参加者の多くの人々の思いであった」とある（『考える子ども』145号、1982年）。

このように、有田実践は初志の会の集会でかなり厳しい批判を受けた。長岡文雄氏も同席しており、はっきり批判をしたという。その後、長岡氏は「有田和正氏の論文を読んで考える」を『授業研究』（1985年1月号）に書いている。これは、直接的には、有田氏の「長岡文雄の主張を授業で検証して」（『授業研究』1984年9月号）に対するものであるが、一連の有田実践を批判したものである。

この「長岡・有田論争」にかかわって、『社会科教育』（1985年7月号）は、特集「シンポジウム—教材に『切実性』は必要か」を組んでいる。

3. 長岡・有田論争と教材観

(1) 有田氏の教材観

有田氏は、先の論文（『授業研究』1984年9月号）で、長岡氏の主張を徹底的に学び、盗みながら実践してきたが、現在、次の点で考え方が異なるとしている。

①問題に対する考え方の違い

導入時に、子どもにどのようにして問題をもたせるかという方法の違いである。

有田氏は、現在の子どもの生活には解決しなければならない切実な問題が存在しないと、この子どもの実態に合う導入法として、次のような工夫をしているという。

具体物を見せて具体的に考えさせたり、普段見なれているのに正確にはわかっていないことを自覚させるような問いかけをしたり、教材を工夫するようになったと。

つまり、面白い教材（授業のネタ）の発掘・提示→子どもの常識的な考えや知識の揺さぶり→追究の意欲の引き出す、これが有田氏の問題の発掘方法である。

この意表をつく教材によって引き出された最初の問題は子どもの日常生活に根ざしたものではなく、子どもにとって切実ではないという批判に対して次のように述べている。

しかし、最初は切実な生活の問題ではないけれども、追究しているうちに生活の根になるところではちゃんと関連しているのである。

また、私の提示した教材を契機として子どもたちが執ように追究している事実をどう考えるべきだろうか。子どもの切実な問題になり得ているからこそ追究しているのではないだろうか。

社会全体が豊かになり、子どもたちの生活にも、社会にも、今すぐ何としても解決しなければならないような問題はないようにみえる。こういう状況の中で切実な問題を発見させるには、意表をつく教材が必要ではないだろうか。

②教材に対する考え方の違い

有田氏は、長岡氏との実践の違いを次のように述べている。

長岡先生の実践は、子どもをとらえることに比重をかけるあまりに、教材のおもしろさに欠けるのではないかと思う。やってみたくなるようなユニークな教材があまりみあたらないように思う。

わたしは、問題を掘りおこすための意表をつく教材さがしから出発して、ゆさぶるための教材や興味をもって深く追究するような教材開発に力を入れるようになってきた。

さらに、有田氏は「教材はどこかに客観的に存在するのではなく、教師自身によって把握されたものにほかならないのである」とも述べている。教師自身が疑問や意欲を持つことのできるものが「教材」となるのであり、

教師は、先を見通した面白い教材を開発することが必要であるとしている。

このように、有田氏の教材観は、端的に言えば、子どもに追究力をつけるためには、教師自身が面白教材を開発し、それを子どもに提示するというものである。

(2) 長岡氏の教材観

長岡氏は、先の論文（『授業研究』1985年、1月号）で、有田氏の教材開発の基本姿勢を、次のように批判する。

「子ども本然の問い」、これをはぐくみ育てることを教育の根幹に据える立場がぐらついてはいないか。「子どものために—子どもを偉くするために」とは言っても、「人間に対するこわさ」を忘れることはないか。「<この子>にとっての意味」の洞察が弱くなってはいないか。教材優位、教師優位で走りかけてはいないか。

「墓地」の指導では、教師が墓地の情報に酔って、ひとりよがりになったところがあったのではないか。

要するに、長岡氏は、「<この子>の本然の問い」に目を向けことの重要性を主張している。また、子どもの意表をつく、「意外性」のある教材開発の姿勢を、次の2つに区別する。

①子どもが自立し、意外性を自ら求め、それを生む条件をつくり出し、個性的、創造的に学習する力を創り出していく。

②教師よりの意外性をもたらす刺激を待つて動く、受動的な子どもとなる。

長岡氏は、②の教師からの刺激を待ち、これに調子を合わせることの上手な子どもになることを心配している。さらに、「教師が開発した教材」提示だけではなく、「子どもたちの中にある（相互の中にある）教材」の提示を重要視している。

長岡氏は、教師が子どもをびっくりさせ、おもしろくあやつる授業をくり返すと、子どもの自立を妨げると考えている。氏は、自己を静かに見つめ、自らの学習法を開拓する子どもを求めている。

4. 「教材の切実性」をめぐる

長岡・有田両氏の論点の一つは、社会科授業において「切実性」をどのようにとらえるかという問題である。長岡・有田論争にかかわって、谷川彰英氏は、『社会科教育』（1985年7月号）の提案論文の中で、「切実性」を次のように分類している。

①〈切実である〉派と〈切実になる〉派

前者は切実である問題（教材）を発見し、そこから出発しようとする考え方で、長岡氏はこの派に属する。後者は切実な問題を発見するために意表をつく教材を提示する考え方で、有田氏はこの派に属する。

②「方法における切実性」と「認識における切実性」

前者は学習者と社会とのかかわりを問題にする視点であり、後者は人間と社会とのかかわりを問題にする

のか、または、できなかったのか、つまり、子ども一人ひとりにとっての「教材の意味」を問う必要がある。これが、社会科の授業や教材の研究姿勢であろう。

今、アクティブ・ラーニングが新しい教育方法として脚光を浴びているが、決して新しいものではない。これは、本来の社会科教育授業の理念の中に含まれているものである。

ここで取り上げた長岡・有田論争に見る授業観・教材観を再確認することによって、アクティブ・ラーニングも意義あるものになると考える。

【附記】

- 1) ここで取り上げた論争については、拙稿「社会科教材観をめぐってどんな論争があったかー長岡・有田論争を中心にー」（『社会科教育』1994年12月号）を修正したものである。この号のテーマが「教材観を巡る論争ーいま何が問題か」となっていた。ここでも、有田氏は「面白くなければ教材じゃない」という小論を書いている。
- 2) 有田和正氏の略歴を紹介しておく。著者紹介によると、次のようになる。1935年、福岡県生まれ、玉川大学文学部教育学科卒業。1958年に福岡県の公立小学校教諭となり、1967～1976年、福岡教育大学附属小倉小学校教諭、1976～1992年、東京教育大学・筑波大学附属小学校教諭、1992～1999年愛知教育大学教授。その後、教材・授業開発研究所の代表、2006～2010年、東北福祉大学子ども科学部教授を務めた。生涯200冊に及ぶ著書等があり、1989年4月に『有田和正著作集 追究の鬼を育てる』全20巻・別巻3巻を著している。なお、『人を育てるー有田和正追悼文集』（小学館、2014年）が出版された。
- 3) 長岡文雄氏の略歴も紹介しておく。著者紹介によると次のようになる。大正6年、福岡県に生まれ、昭和12年、小倉師範学校卒業、福岡県公立小学校訓導となり、昭和14年、小倉師範附属小学校訓導となる。昭和18年、奈良女子高等師範（現在奈良女子大）訓導、奈良女子師範学校附属小学校教諭・副校長、兵庫教育大学附属小学校副校長、兵庫教育大学教授、佛教大学教授を歴任。主な単著は、『考えあう授業』（1971年）、『子どもをとらえる構え』（1975年）『子どもの力を育てる筋道』（1977年）、『合科教育の開拓』（1978年）『若い社会科の先生に』（1980年）『〈この子〉の拓く学習法』（1983年）、『授業をみがく』（1990年）などがあり、いずれも黎明書房から出版されている。